子どもセンターてんぽ　NEWS LETTER

てんとうむし

vol.20

発行日：2017 年2 月

年末に思うこと

監事　玉越浩美

２０１６年もあとわずかです。

この１年、オリンピックやパラリンピックで日本国中が沸く一方で、春の熊本地震や台風による風水害などの天災があったり、米大統領選での思わぬ結果に世界中が振り回されたり、といろいろなことがありました。

大して素晴らしいこともなかったけれど、特に大きな問題もなく１年間を過ごせたことは、実はとても幸せなことだと思います。

つい先日、１つの悲しいニュースが心を捉えました。九州の病院で、暴走したタクシーが建物に突っ込み３人の方が亡くなられた事件です。

何気なくニュースを見ていて、犠牲になった方のうちのお２人がお若いご夫婦であることに気づき、もしかするとまだ成人されていないお子さんがいらっしゃったのではないかと気になっていたところ、翌日の続報のニュースで、まだ小学校低学年のお子さんが１人残されてしまったことを知りました。

兄弟もおらず、たった１人この世に残されてしまったお子さん・・・この残されたお子さんのこれからの人生はどうなるのだろうかと心配でなりませんでした。

おじいちゃん、おばあちゃんは元気なのだろうか、頼れるおじさん、おばさんはいるのだろうか、今までの学校に通えるのだろうか。

そして、寂しくて、悲しくてどうにもならないときにぎゅっと抱きしめてくれる大人が近くにいてくれるだろうか。

家族のあり方にもいろいろあると思いますが、自分にとっての家族とは最後の砦、最後まで自分を信じ、味方でいてくれる存在であり、家庭は子どもたちがいつでも帰れるホームグラウンドにしたいと思っています。

このお子さんはその「家族」「家庭」を一瞬にして失ってしまった。

これからこの子と関わっていく人たちは、どんなに頑張っても、亡くなられたご両親に替わることは難しいと思います。

でも、「自分はあなたを信じているし、とても大切に思っている」「帰りたいときにはいつでも帰って来て」という気持ちを持ち続けること、そしてそういうメッセージを相手に送り続けることはできるのではないかと思います。

私はてんぽ、みずきに関してはほぼ会計監査に携わるのみですが、数年来関わりを持っている児童養護施設を年に何度か訪れます。

それぞれに理由があって、家族と一緒に暮らせない子どもたちが生活しています。

何度か訪れている間には家庭に戻って行く子どもたちもいますが、戻ることなく社会に出て行く子どもたちも大勢います。

施設の職員の方たちだけではなく、社会の大人たちみんなが、彼らに「信じてるよ。見守ってるよ」とメッセージを送り続けることができれば。

そう思った２０１６年の年末です。

飛び立つために羽を休めてＸ

「人はどうやって大人になるか～成人年齢を考える～」開催のご報告

藤沖　彩

平成２８年５月２１日、戸塚にある男女共同参画センター横浜において、シンポジウム「飛び立つために羽を休めてＸ　人はどうやって大人になるか～成人年齢を考える～」を開催しましたので、その様子をご報告いたします。

最初に、理事の高橋温より、子どもシェルターてんぽの１年間の活動報告をいたしました。シェルターの概要と１年間のシェルターの利用状況に加え、今後１年間の課題として、平成２９年にＮＰＯ設立とシェルター開設から１０年を迎えることから、今までの活動を振り返ること、１０周年のイベントに向け準備を行うこと等を挙げました。

次に、自立援助ホームみずきの家スタッフの青柳薫より、みずきの家からも１年間の活動報告がなされました。みずきの家の概要や利用状況、子ども支援者講座の紹介、みずきの家の中の様子のご報告に加え、現在のみずきの家の様子がよく表れている利用者の方が作成されたメッセージ付の紹介写真のビデオを上映しました。

続いて、医師の金井剛さんによる基調講演「子どもの成長発達について」が行われました。金井さんは、平成２８年３月まで横浜市中央児童相談所長を務められ、現在は三重県立小児心療センター　あすなろ学園という児童精神科の病院と医療型障害児入所施設の複合施設の園長をされています。金井さんご自身の精神科医師として、また児童相談所でのご経験、ご自身の子どもの父親としてのご経験にもとづいた講演が行われました。子どもが大切にされること、大人に関心を向けられること、見守られることが子どもの成長発達に大きな影響を与えること等、沢山のお話しをいただき、そのどれもが子どもの成長発達について理解を深めるものでした。

シンポジウムの後半には、パネルディスカッションが行われました。パネリストとして、あすなろサポートステーション所長の福本啓介さん、日弁連子どもの権利委員会事務局長であり、東京のカリヨン子どもセンターの理事でもある相川裕さん、基調講演をお話しいただいた金井剛さんを迎え、コーディネーターは理事長の影山秀人が務めました。福本さんからは、児童養護施設等の退所児童の自立支援、アフターケア等を行っているあすなろサポートステーションの活動と具体的なケースの紹介などが話されました。相川さんからは、１８歳から選挙権が認められたことに鑑み、民法の成人年齢も引き下げるべきではないかという議論があるが、各法律ごとに成人年齢が異なることは法律上は矛盾はしなくとも、民法の成人年齢が変わると他の法律や制度に影響を与えるのではないかということや、カリヨンが取り組むステップハウスに関するお話しなどがありました。金井さんからは、基調講演を補足するお話しや、カナダに調査に行ったご経験などもふまえながら日本では１０代後半の子どもの自立を支える制度は不十分であるといったお話しがありました。

当日は児童福祉関係者をはじめ多くの方にご参加いただき盛会となったことをご報告するとともに、足をお運びいただいた皆様にはあらためて御礼申し上げます。

今年の『オレンジリボンあどばるーん』
～寒かったけど温かかった～

みずきの家　広報ボランティア　深谷晴子

手を抜いたわけではありません、「天まで届け！メッセージ」今年もやらせてもらいました。メッセージを書いていただくオレンジリボン、繋げた赤いハートの風船、海風に煽られて苦しそう。どんより曇り空で寒かった～。でも、てんぽブースは元気でしたよ。みずきの家の利用者さんが３人も参加してくれたのです。ブースを訪れる子どもたちには頼りになるお姉さん、やさしさ全開の笑顔で。風船が飛ばないようにリボンを手首に巻きつけてあげる人…得意なイラストで風船に輝きを映す人…寒いからお茶をと私たちを気遣ってくれる人…ほっこり、じーんと何度も心が温かくなりました。この日のための準備も楽しみで、風船を繋げておくグッズを手作りし、看板もリメイク、ハロウィン柄の風船を用意しました。キャラクターのぽんた君&みずきchan♡と、ポストカード3枚セット(寄付100円)も初登場！お客様にパンフレットや通信を配布して説明しました。ヘリウムガスが終わっても、ハロウィン仮装ファミリーや少女ダンサーを前に、スタッフ全員で風船を膨らませ、大忙し。たすきリレーの一体感・充実感をブースにいながら体験させてもらいました。楽しかった～！お客様の心にも、この日のふれあいが刺激になってくれたらいいなと思います。

子どもシェルター全国ネットワーク会議 in 岡山

シェルタースタッフ

２０１６年度の子どもシェルター全国ネットワーク会議に参加してきました。今年は岡山での開催です。

１日目は、子どもシェルター全国ネットワーク会議の総会を行った後、シェルター運営者、子ども担当弁護士、シェルタースタッフ、の３つに分かれて分科会を行いました。

２日目は、全体交流会として、１日目の分科会毎の報告・まとめを行い、シェルター活動の在り方や今後の方向性、新規シェルター開設予定団体に向けてのアドバイスなどを行いました。

１日目のプログラムで印象に残ったことは、分科会での事例検討会についてです。

私は、シェルタースタッフの分科会に参加しました。そこでは、「子どもの思いを想像し、気持ちに寄り添う」をテーマに、３０名程の方が参加されていました。架空の事例を元に、スタッフはその子にどのような対応をするべきなのか、その子はどのような思いをして今に至るのか、について話をしました。

シェルターでは、子どもとの面接場面だけが子どもとの関わりの場ではありません。それ以上に、日常で一緒にお喋りをして、ご飯を食べて、テレビを見て、といった他愛無いやり取りをくり返す中で、子どもが大切なことを話したくなる瞬間があるのだろうと感じています。そんな子どもの「今」をいつでも受け止めていきたいです。その繰り返しが、人を信頼出来る力に繋がると思うので。

２日目のプログラムはどの内容も印象に残っていて、どの内容を書けば良いのか迷う程です。

シェルタースタッフという立場から話をすると、スタッフの人材確保、スタッフ定着のために大切なこと、についての話が印象に残りました。

人材確保では、福祉施設での経験の有無、資格の有無だけではなく、シェルターという独特な業務に馴染めるかが大切、との話がありました。私は学生の頃からいくつかの資格を所得して、てんぽに就職しました。てんぽで働いていて思うことは、ただ資格を持っていれば良いのではなく、程よくシェルターの雰囲気に馴染んだ上で、自分の武

器を生かした支援を行うことの大切さです。シェルターだからこそ出来る支援と、自分の出来る支援との組み合わせ方を考えていくことが、大切なのだと感じています。

職員配置基準の見直し、子どもの定員と措置費、シェルターと自立援助ホームの差異、など、まだまだ多くの課題が残る子どもシェルターですが。だからこそ、少しずつ変化していくシェルターの在り方に愉しさを感じています。

全国から集まったシェルター関係者との関わりから、たくさんのエネルギーをもらいました。これからも頑張っていきたいです。

全国シェルター便り⑥

特定非営利活動法人子どもセンター帆希　副理事長　中溝明子

初めまして。千葉県で子どもシェルターを運営しております「子どもセンター帆希（ほまれ）」です。豊かな海に恵まれた千葉県の子どもたちを海を進む帆船に見立て、子どもたちの希望に向けての航海を、帆に力を与える風となって後押ししたいという決意を込め、法人に「帆希（ほまれ）」という名前を付けました。

子どもセンター帆希は、２０１４年１月に設立し、同年１２月には女子を対象とした「子どもシェルターはるつげ荘」をオープンしました。けれども、スタッフ不足のため、２０１５年８月、やむなく子どもシェルター事業を一時休止し、その後、再開に向けて尽力して参りました。そして、多くの方のご支援とご理解を頂き、２０１６年４月より子どもシェルター事業を再開することができました。

シェルター再開にあたっては、①児童相談所の元一時保護課長による日常生活支援のスーパーバイズ、②ボランティアコーディネーターの新設、③宿直体制強化（スタッフとボランティアの２名体制）などの新体制を整えました。これに加え、月１回、支援会議を開催してケースワークを行い、法人全体で入所している子どもたちの支援にあたっています。子どもたちの最善の利益を考えながら支援をしていますが、実際には迷いや不安が多いものだと実感しております。私たちの船出は始まったばかり。これからも「帆希（ほまれ）」の名に恥じぬよう頑張って参りたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

みずきの風

加藤利明

夜半過ぎから降り出した霙が本格的な雪に変わりました。１１月下旬のこの時期に雪が降るのは５３年ぶりとか…本当に珍しい…仕事に出かけるそれぞれの利用者の反応の違いに苦笑しながら、寒さに肩をすぼめて歩き出す背に向けて「気を付けて…」と声をかけました。

みずきの家に暮らし、ここからアパート生活へと移行する１０代後半の女性と関わっていると、彼女たちの貧しさを強く感じます。中学卒業の学歴で、頼る大人もなく、やっと見つけたパートの仕事をどんなに頑張ってみても、貯金ができるほどの給料はもらえません。「その日暮らし」「火の車」の家計にあって、食費を切り詰め、おしゃれの誘惑に蓋をして、月額１万円余りの小遣いでたまの休みに街をぶらつくのを楽しみにしながら生活している現実を思うと、支援者としての気持ちは暗く沈み、釈然としない思いに駆られます。

国際貧困支援ＮＧＯオックスファムの報告書には「全世界の大富豪の上から６２人の総資産の合計は、全世界の下位半分３６億人の総資産の合計と同じ」であると書かれて

います。現代社会が抱えるゆがみと問題の深刻さに、将来に対する強い不安を覚えるのですが、それでも私たちに出来ることは限られています。目の前にいる彼女たちと共にどのように生きるか…その問いを問い続けるしかないと自分に言い聞かせています。

子どもセンターてんぽを利用して⑮

某市　女性相談員

年明け早々、一人の少女が一時保護を申し出てきた。既に児童福祉法の対象年齢ではなく、未成年の社会人だった。虐待を訴えるが、多くを語らない。しかし、支援者同士の協力の結果、女性相談での一時保護に繋がった。また、今では自立に向けて頑張っていると聞いた。

彼女と関わり、「家族の在り方」について、考えさせられた。彼女は、どこにでもいそうな、両親と妹との四人家族の一員だった。家族全員が、仕事や学校が終われば、当たり前に家に帰る。彼女の家族も、そうに違いないと思う。普段から家にも寄り付かず、無断外泊等を繰り返す少女なら、「またか」と言われるかもしれない。だけど、いつも家に帰って来る娘が、帰って来ない。ある日突然、身の回りの荷物と共に消えて、連絡が取れなくなる。こんな状態になれば、どんな親だって必死に探すだろう。私だったら、絶対にそうすると思う。しかし、彼女の家族は、執拗に追跡しなかったことが、私にはショックでしかなかった。就職などを機に自立するので家族の承諾の上で家を出た訳ではないのに。突然、昨日までの家族の形が崩れたのに。私自身が、自分の家族と重ね合わせ、もどかしい気持ちで一杯になった。

彼女が、本当の気持ちを話すまでに時間が掛かったが、勇気を出してくれた事で、支援が進んだ。二十歳になり、彼女への支援は終了した。これからは、陰ながら彼女を応援したいと思います。

子どもの家から

子どもシェルターてんぽスタッフ

子どもたちがてんぽに入所する際に、スタッフから食べ物の「好き嫌いはある？」と聞きます。だいたいの子が好き・嫌いはないと答えるか、１つや２つ好き・嫌いをあげます。

それを基に好き・嫌い表を作り、冷蔵庫に張っておきます。すると日に日に、好き・嫌いが書き足されている事に気が付きます。中には、枠からはみ出すくらい書く子もいます。

私はそれを見ると、ほっこりとした気分になります。

入所面接の場面や、入所してから数日・子どもによって数週間は、周りに話を合わせたり、ニコニコと振舞ったりと、とてもいい子に過ごす子が多いです。スタッフやボランティアさんといった大人に囲まれ、良い子でいようとするためか、気を使い、「好き・嫌いはない。少ない」と答えている様です。

だんだんとてんぽでの生活に慣れてきた頃に、書き足している子が多いと感じます。

「お？自分の意見が言えそうかな？」「気持ちを言いたくなっているのかな？」と、好き・嫌い表が、自分の気持ちを表す第一歩に私は感じています。

少しずつで良い。一歩一歩自分を出してくれたらと思います。てんぽスタッフもいろんな所から、子どもたちの気持ちを読み取っていきたいと思っています。

そして、子どもたちが自分を出せる環境作りが出来たらと思います。

ご支援ありがとうございます

てんぽは、平成１８年に発足して以来、個人や企業のみなさまから多大なご支援をいただき活動を継続してくることができました。

今年度も多くの個人・団体の方にご支援をいただいています。金銭でのご寄付やお米・食品等の品物でのご寄付により、私達の活動を支えていただき本当にありがとうございます。

今年度もシェルターと自立援助ホームには居場所の無い子ども達が入所してきています。電話相談の件数は１２月までの集計では昨年以上のペースです。

てんぽを必要とする子ども達に対して、充実した支援を継続するためには、スタッフに安心して働いてもらえる体制を作っていく必要があります。発足から１０年めではありますが、まだまだ財政基盤が整っているとは到底言えない状況です。

新しく会員になって活動を支えて下さる方がいらっしゃる一方で、ご自身のライフステージの変化等で退会される方もいるため、正会員・賛助会員の人数は近年横ばいの状況です。

つきましては、てんぽの活動を一人でも多くの方に広めていただき、一緒に活動を支えていただける方をご紹介いただけると大変有り難いです。

みなさまからの変わらぬご支援に感謝させていただきますと同時に、今後ともより一層のご支援を賜りたくお願い申し上げます。

ご協力のお願い

てんぽは、すべて会員の入会金・年会費とご寄附等で運営しています。皆様のご入会とご寄附をお願いします。

正会員	入会金 5,000 円、年会費 5,000 円
賛助会員	入会金 3,000 円、年会費 3,000 円（１口）

寄付　金額の多少に関わらず、大歓迎です☆

【振込口座】

◆ 三菱東京 UFJ 銀行　新横浜支店
普通預金口座　口座番号　0350513
「特定非営利活動法人　子どもセンターてんぽ
理事　影山秀人」

◆ ゆうちょ銀行
口座記号番号　00260-8-133408
特定非営利活動法人子どもセンターてんぽ

通常総会・イベントのお知らせ

下記の日程で、第１１回通常総会＆１０周年記念イベント「飛び立つために羽を休めてXI～シェルター開設１０周年特別企画～子どもが語る”シェルターと私”２」を開催します。タイトルのとおり今回はシェルター開設１０周年特別企画です。みなさまお誘い合わせの上、ぜひご参加ください。

日時：平成２９年５月２８日（日）
通常総会：１２時１５分より
イベント：１３時３０分より（１３時開場）

場所：横浜市市民文化会館 関内ホール
（横浜市中区住吉町４－４２－１）

編集後記

てんとうむし第２０号をお届けします。

今回は、私の不手際で発行が遅くなってしまった結果、巻頭言その他記事の内容が少し時期はずれになってしまい、申し訳ありませんでした。

ニューズレターはてんぽの具体的な活動内容を知っていただく貴重な機会なので、今後も年２回の定期発行を続けていきたいと思います。

記事に対するみなさまのご意見等がございましたら、ぜひお気軽に事務局までご連絡ください。

「てんとうむし」は特定非営利活動法人子どもセンターてんぽ事務局が、責任を持って編集・発行しております。本誌に関するご意見等ございましたら、下記までご連絡いただきますようお願い申し上げます。

子どもセンター てんぽ事務局

〒222-0033
横浜市港北区新横浜 3-18-3 新横浜法律事務所内

Tel　：045-473-1959
Fax　：045-477-5822
E-mail：info@tempo-kanagawa.org
HP　：http://www.tempo-kanagawa.org/

デザイン協力：川島さよ子

※無断転載はご遠慮下さい。